

論文審査の結果の要旨

平成 29 年 2 月 13 日

氏 名：伊原 美好

論文題目：佐多稲子の戦中・戦後の文学 ―外地・在日・原爆・闇市の女性表象―

伊原美好（人文科学研究科 比較文化専攻）学位請求論文『佐多稲子の戦中・戦後の文学―外地・在日・原爆・闇市の女性表象』は、佐多稲子の戦中戦後の4作品における女性表象について、膨大な歴史的文献や新しい批評理論、先行研究を駆使しながら、広い視点から時代との関係性の中で読み解いた論文である。

第1章の「分身」論では、日中戦争における日中混血少女の苦悩、分裂意識から居場所を求めて彷徨し自殺を繰り返す魂の軌跡を解析。第2章の「重き流れに」論では、日本の植民地「満州」に渡った夫婦を核に、さまざまな階層の人々について考察し、ことに、フェミニズム/ジェンダーの視点から、日本の古典文学「蜻蛉日記」以来の妻の怨念と抵抗に通じる問題として、円地文子の「女坂」と比較して論及している点は、先行研究を越えた力作論文となっている。

第3章の「風になじんだ歌」論では、闇市という「場」で生きる酒場のマダムを中心に娼婦や敗残兵、浮浪児に視点を据えて敗戦後の状況を考察。ふんだんに資料を駆使して、敗戦後の混乱から復興にかけて生き延びる新宿の闇市を考察した好論である。人々に救いの手をさしのべる酒場のマダムを闇市のマリアに喩える着想もユニークだ。ただ、主人公のマダムが割烹着を着用して素足のまま下駄履きで歩くのは普段着で闇市を歩くということの意味し、闇市に根ざして生きていることを象徴しているが、それが制度外に生きる山姥的存在であることを十分には説明しきれないきらいがある。

第4章の「樹影」論の資料の使い方は抜群である。これまで「樹影」は原爆文学として論及されてきたが、ここでは日本の戦中戦後において差別・抑圧されてきた在日問題に焦点を当て、故国に帰れぬまま長崎で生きる父娘の華僑家族の複雑なありようを詳細に分析。ことに被爆者であり妻子ある日本人画家との愛の苦悩を通して、同じく被爆者である華僑の女性が民族意識に覚醒して精神的自立を遂げていく過程を執拗に追跡した点は、先行研究を前進させている。

以上、日本近代の激動期を生きる女性たちの深層のトラウマを可視化した佐多稲子文学を、長い時間をかけて究明し、文字通りの労作となっている。

口述試験ではとくに、戦中から戦後にかけての「時代」と、満州・闇市・ナガサキ等のトポスという視点から4作品を考察している点を評価された。そして、「重き流れ」の時代の証言性を論証し、時代の中で読み込むことに成功していると、評価される。同時に表記・表現の不備、脚注・巻末文献リストの不備も指摘されたが、最終段階で不備や説明不足の点も修正して提出した。

主査	城西短期大学	長谷川 啓
副査	人文科学研究科	水田 宗子
副査	人文科学研究科	北田 幸恵
副査	人文科学研究科	和智 綏子